

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00657

研究課題名(和文) コミュニケーション文体論の応用と言語教育・研究における汎用性に関する研究

研究課題名(英文) The Application of Communicative Stylistics to Foreign Language Education and Research

研究代表者

寺西 雅之(Teranishi, Masayuki)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：90321497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文学作品が主対象だった文体論を非文学テキストの分析に援用し、「コミュニケーション文体論」の学術的意義と汎用性を立証することを目的とした。研究方法としては、まず(1)オーセンティックなテキストを収集し、(2)その質・量的な分析より非文学言語の技法・文体の特徴を明らかにした。最後に、(3)書く、話す、プレゼンテーション等のアウトプット力に焦点を当てたコミュニケーション教育への応用を試みた。本研究活動を通じて、コミュニケーション研究・教育の視点からグローバル市民の育成に寄与することを目指し、国内外の教育者・文体論研究者とも協力し、英語およびコミュニケーション教育に関する提案を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、文学(的)テキストを対象とする文体論の手法を援用することで、高齢者やALTの語り、観光コミュニケーション、医療ノンフィクション等多様なテキストの理解と解釈を試みた。これは文学作品の分析・批評が中心だった文体論の汎用性を拡大したという点で学術的意義があり、「コミュニケーション文体論」さらには「応用文体論」という新しい学術分野の創設に貢献したと考えられる。本研究の社会的意義に関しては、少子高齢化、グローバル化、技術革新等の影響でコミュニケーションの様式が変わっていくなか、介護、教育、医療等の現場で展開されている会話やナラティブを収集・分析したことは、社会の深い理解に繋がる活動と言える。

研究成果の概要(英文)：The overall aim of this study has been to uncover the pedagogical implications for English and/or communication studies of applying the theory and knowledge of literary stylistics to the study of non-literary texts. This study has attempted to establish "Communicative Stylistics" as a new scientific research area by examining its academic significance and applicability. For this purpose this study has addressed the following points: (1) the collection of authentic texts, (2) the textual analysis of literariness and narrative skills in non-literary discourse and daily conversation, and (3) the improvement of English education oriented towards output such as writing, speaking, and presentation. Finally, collaborating with educators and stylisticians within and outside Japan, we have made several proposals on ways in which English and communication education could be improved.

研究分野：応用文体論

キーワード：文体 コミュニケーション ナラティブ 教育 医療 社会 観光 環境

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した平成30年(2018)においては、文体論が英語教育への関心を高めていた一方で、その中心的役割は、文学テキストの分析、特に難解な文学作品の分析だったと考えられる。すなわち、文体研究が古典や実験的な文学作品の理解・解釈に焦点を当ててきたため、「書く」「話す」を中心とするコミュニケーションスキルの向上という実用的・教育的観点に欠けていたと言えるだろう。また、社会のグローバル化に伴い、庶民レベルでのコミュニケーション(日本語および外国語)の重要性が高まるなか、この方面に関して文体論が十分な役割を果たしてこなかった点も指摘できる。例えば、日本社会のグローバル化は医療の現場にも影響しており、日本の病院においても患者と医師が英語を用いてコミュニケーションを図る場面が増えてきている。このような場面での適切なコミュニケーションのスタイルとは何かという問いは、現在も益々重要度を増しているが、このような問題に関して文体論を援用した試みは少なかったと言える。最後に、社会変化に伴うコミュニケーションの多様化と文体の問題がクローズアップされ始めていたことも重要である。例えば、科学技術の発展に伴い、メール、スマートフォン、ライン等様々な形態のコミュニケーションが生まれているが、そのスタイルとはどのようなものか？また、災害等の緊急事態において、最も効果的な情報伝達のスタイルはどのようなものか？さらには、研究開始当初は、コロナウイルス感染症拡大以前であり、また東京オリンピックを控えていたこともあり、日本における観光と訪日客を対象とした観光コミュニケーションの在り方は、重要な課題であった。このような問いに答えるために、文体論が果たすべき役割は大きいのではないかという思いが、本研究を始めるインスピレーションとなっていた。

2. 研究の目的

1で示した研究開始当初の背景を踏まえ、本研究は、文体論の理論と分析枠組みの援用により、様々な分野・場所・場面で実施される外国語及びコミュニケーションのメカニズムの理解を深め、さらにその教育分野への応用を試みた。研究代表者が科学研究費挑戦的萌芽研究「コミュニケーション文体論の学術的意義とその教育性・社会性・国際性に関する研究」(平成26~28年度)において提唱した「コミュニケーション文体論」の学術的意義と汎用性を立証し、さらには様々な社会問題の理解・解決を目指す「応用文体論」へと発展させることが、本研究の最終的な目的であった。また、学術的独自性・創造性を踏まえた具体的目的は、(1)文体論の非文学テキストへの援用による言語コミュニケーションの深い理解、(2)文体論の英語・コミュニケーション教育への応用、(3)諸外国語との比較によるコミュニケーション研究の深化とグローバル化への対応、の3点である。

まず、(1)に関してであるが、これまでの文学テキストを対象にした文体研究が、文学作品を理解し、解釈し、そして味わうことを主目的としていたのに対し、本研究は、その文学文体論の理論と分析枠組みを、日常口頭言語を含む言語コミュニケーション全般の深い理解に役立てるという実用的な側面を持つ。近年、多様なテキスト理解のための文体論の活用は急速に進んでいるが(豊田昌倫、堀正広、今林修(編著)(2017)『英語のスタイル-教えるための文体論入門』参照)、効果的なコミュニケーションのスタイル、特にアウトプット力、すなわち伝達する側から見たコミュニケーション力の実態に関しては今現在でも十分な研究がなされていない。さらに、災害等緊急時の連絡体制やその情報伝達のスタイル、日本在住外国人の視点から見た公的な指示・案内の日本語のスタイル、また医療現場での英語による医師・患者間の情報交換・意思疎通等、益々多様化するコミュニケーションのスタイルの分析と理解は、日本社会においても喫緊の課題となっており、文体論としてこのような社会的要請に応えることは、学術的・社会的意義があるものと考えられた。

(2)は、文体論の知見を英語およびコミュニケーション教育に活用するという視点である。(1)でも述べた通り、社会のグローバル化や技術革新等が要因となり、言語コミュニケーションは益々高度化・複雑化しており、日本人に対する日本語コミュニケーション教育の必要性もしばしば指摘されている。本研究は、文体論の援用により、情報・意志伝達力、特に発信力の育成を目指すという教育的視点を有しており、文体・コミュニケーション研究を「理解型」から「実践型」に転換するという目的を持ったものである。

(3)に関しては、日本語・英語に加えて、仏語等の外国語のテキストの収集と分析を行い、コミュニケーションのメカニズムの普遍性や相違点の解明を目指した。本研究において学術分野としての深化と定着を目指すコミュニケーション文体論は、文学作品や文献を理解・解釈することだけではなく、書く・話す言葉に焦点を当て、文体や技法を効果的に用いる方法や意志・情報伝達力を向上させる方法の追究を試みるものである。外国語における様々なコミュニケーションの事例を研究対象にすることにより、国際理解とグローバル市民の育成を促進することを目指した。

3. 研究の方法

これまで述べた通り、本研究は、「コミュニケーション文体論」の理論的枠組みのアップデー

トとその援用により、外国語及びコミュニケーションに関する深い理解とその教育への応用を目指したものである。この目的実現のために取られた研究方法は、以下の3段階に分けられる。

(1) オーセンティックなテキストの収集

まず、意志・情報伝達を目的として口頭で行われている対話・スピーチ等のオーセンティックな言語データを、ボイス・レコーダーやビデオ等の機器を用いて録音・録画し、書き起こしデータとして収集した。また、フィールドワークを通じて、国内の外国語による案内や標識、観光用パンフレット・説明など多様なテキストを収集した。テキストデータに関しては、実際に行われている会話等のデータに加えて、インターネット等で公開されている類似のテキストや映像も活用した。

(2) 質・量的文体分析

それぞれのテキストのテーマ・話題等の内容分析を行い、話者・作者の意図やメッセージの目的等を明らかにした。次に、文体に着目したテキスト分析を行い、テキストの内容と文体の関連性について考察した。分析では、隠喩・直喩等の比喩表現や矛盾語法等の文学的技法、さらには話法・視点、時制、時系列性等の物語論的要素に着目した質的分析を行った。加えて、特定の語の使用頻度や繰り返し、さらにコロケーション等に着目した量的な分析も行った。これらの分析は、文学文体論の分野で定着している認知文体論とコーパス文体論の理論と手法に基づき、適宜修正を加えつつ実施した。

(3) 英語・コミュニケーション教育への応用

(2)の文体分析結果を踏まえ、「理解型」から「実践型」への変換を目指し、日本人英語学習者の英作文、スピーキング、さらにはプレゼンテーションの教育に文体論を応用し、その改善を行った。教育実践に関しては、英語に加えて、日本語や仏語等も対象とし、メタ言語能力やコミュニケーション能力の育成も目指した。

以上の3段階の研究活動と並行して、当該分野における先行研究の再読・再考と仮説の設定・見直しを行い、研究手法の確立・見直しも随時行った。また、国際社会で主体的に活躍できるグローバル市民の育成に寄与することを念頭に置き、多様な言語・場面のテキスト分析とコミュニケーション研究・教育を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果は、(1)話し言葉の文体の分析、(2)社会的ディスコースの分析、そして(3)英語学習者のパフォーマンス分析と英語・コミュニケーション教育の改善、の3点に分類できる。以下項目ごとに要点を整理する。

(1) 話し言葉の文体の分析、

金谷・寺西(2018)「ディベートの文体：米大統領選テレビ討論会の分析を題材に」は、文体論の分析フレームワークを話し言葉、すなわち米大統領選挙の演説の分析に援用した研究であり、トランプ、クリントン両候補の用いた文体と大統領候補としての支持率の関連について分析・考察したものである。また、文体論の分析フレームワークを教師や日本で働く Assistant Language Teacher (ALT)の語りの分析に援用し、教師としての成長を文体面から考察した研究も実施した。これらの研究は、文体的技法や文学性に着目した分析が、話し言葉の分析にも有効であることを示唆した研究として重要である。

(2) 社会的ディスコースの分析

本研究では社会性の高い分野として、医療、観光、そしてメディアの多様なテキストを収集・分析している。まず、医療分野のノンフィクション・ナラティブにおける病の語りの分析から患者の内面の変化を論じた Teranishi (2019) “Stylistics as a Bridge Between Literature and Medicine: Embedded Focalizers in the Nonfictional Narrative of *Brain on Fire*” は、文体論を専門とする国際学会 Poetics and Linguistics Association 年次大会にて発表された。また、文学テキストを用いた医療コミュニケーション教育を提案した寺西(2021)「国際教養と医療人文学 英語文学作品を通じた医療コミュニケーション教育に向けて」は、招聘論文として『N: ナラティブとケア 12号』に掲載された。観光コミュニケーションを対象とした研究としては、文体論の分析フレームワークを観光ガイド・パンフレットの分析に援用し、日本における観光コミュニケーションの課題について考察した藤本・寺西(2021)「観光コミュニケーションに関する一考察 英語観光パンフレットのテキスト分析から見えること」文体論を観光コミュニケーションの文体分析に援用した荒木・寺西(2022)「観光英語コミュニケーションに関する質的研究 - 京都フィールド調査から見た実情と課題 -」等が挙げられる。また、坂本・寺西(2021) “The Method of Addressing Environmental Issues by U.N. News” は、環境問題の報道の在り方について文体論的に論じたものである。これらの研究は、文体分析を通じて社会への理解を深めるメソッドを示した点で学術的意義があると考えられる。

(3) 学習者のパフォーマンス分析と英語・コミュニケーション教育の改善

Teranishi (2018) “Literature in the EFL Classroom: A Comparative Analysis of Plural Texts of Jane Austen and Kazuo Ishiguro” は、文体論の知見を活かし、Jane Austen および Kazuo Ishiguro の原作小説およびその映像化の分析より、英語教材としての適性・可能性を論じたものである。また、研究書 *Pedagogical Stylistics in the 21st Century* に掲載された論文 Yoshida et. al (2022) “The Impact of L1 on L2: A Qualitative Stylistic Analysis of EFL Learners’ Writings” は、日本人英語学習者の英作文の文体から幼少期の母語および英語教育の影響を推察し、教育的文体論の新たな可能性を示したものである。さらに、Kamizuru & Teranishi (2022) “Typical Errors in Japanese Made by Non-Native Speakers: A Case Study at a Senior School in Australia” は、オーストラリア人日本語学習者の日本語パフォーマンスのエラー分析から、日本語教育の改善を提示したものである。以上の代表的研究が示す通り、本研究では学習者から収集したテキストの分析に基づき、英語・コミュニケーション教育の改善を提案しており、文体論の視点から重要な教育的示唆を提示したと言える。

以上の研究の集大成として、研究代表者および協力者は、2022年2月に研究書『ナラティブ研究の実践と応用』を共同出版し、その成果を広く社会に向けて公表した。さらに、2022年3月20日には、科研費成果発表会「ナラティブ研究の実践と応用」を開催し、同分野に関心のある研究者・教員・医師等と関連するテーマについて議論し、当該分野に関する理解を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoshida Azumi, Teranishi Masayuki, Nishihara Takayuki, Nasu Masako	4. 巻 -
2. 論文標題 The Impact of L1 on L2: A Qualitative Stylistic Analysis of EFL Learners' Writings	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Pedagogical Stylistics in the 21st Century	6. 最初と最後の頁 343 ~ 369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-030-83609-2_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 寺西雅之	4. 巻 12
2. 論文標題 国際教養と医療人文学 英語文学作品を通じた医療コミュニケーション教育に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 N:ナラティブとケア	6. 最初と最後の頁 44-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masayuki Teranishi	4. 巻 -
2. 論文標題 Stylistics as a Bridge Between Literature and Medicine: Embedded Focalizers in the Nonfictional Narrative of Brain on Fire	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PALA 2019 Proceedings online	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 寺西雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 「教養」と「実用」をつなぐ文体論の役割 - ナラティブ・メディシンの実践方法に関する考察 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫県立大学知の交流シンポジウム2019	6. 最初と最後の頁 54-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田安曇・寺西雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 母語と外国語習熟度の相関性についての研究～日本語での読書が英語習得に及ぼす影響～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫県立大学知の交流シンポジウム2019	6. 最初と最後の頁 57-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金谷和香・寺西雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 ディベートの文体：米大統領選テレビ討論会の分析を題材に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本国際教養学会第7回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masayuki Teranishi & Azumi Yoshida	4. 巻 -
2. 論文標題 The Changing Concept of Liberal Arts and the Development of JAILA	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Back to Basics: Renaissance of Liberal Arts Education East & West (2018 International Conference of General Education)	6. 最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 寺西雅之	4. 巻 46
2. 論文標題 文学と医療をつなぐ文体論の役割 Brain on Fireの思考描出の分析を通じて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Persica (岡山英文学会誌)	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 寺西雅之
2. 発表標題 文学テキストから社会的ナラティブへ 文体の連続性に焦点を当てて
3. 学会等名 科研費成果発表会 ナラティブ研究の実践と応用
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯尾伊吹・萩原真奈海・寺西雅之
2. 発表標題 公共施設に見える異文化的視点～京都に見られる多様性配慮と今後の課題～
3. 学会等名 日本国際教養学会第10回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荒木魁・寺西雅之
2. 発表標題 観光英語コミュニケーションに関する質的研究 京都フィールド調査から見えた実情と課題 -
3. 学会等名 日本国際教養学会第10回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rina Kamizuru & Masayuki Teranishi
2. 発表標題 Typical Errors in Japanese Made by Non-Native Speakers: A Case Study at a Senior School in Australia
3. 学会等名 日本国際教養学会第10回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺西雅之
2. 発表標題 【国際教養の現在・過去・未来】メディア・コミュニケーションに焦点を当てて
3. 学会等名 日本国際教養学会第10回全国大会記念シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Azumi Yoshida, Masayuki Teranishi, Takayuki Nishihara, Masako Nasu
2. 発表標題 The Influence of L1 on L2 Proficiency: A Stylistic Analysis of English Writings by Japanese EFL Learners
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子
2. 発表標題 教育文体論を用いたライティング分析 : 日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る
3. 学会等名 日本国際教養学会第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤本めぐ里・寺西雅之
2. 発表標題 観光英語に関する一考察 英語観光パンフレットのテキスト分析から見えること
3. 学会等名 日本国際教養学会第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 So Sakamoto & Masayuki Teranishi
2. 発表標題 The Method of Addressing Environmental Issues by U.N. News
3. 学会等名 日本国際教養学会第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masayuki Teranishi
2. 発表標題 Stylistics as a Bridge Between Literature and Medicine: Embedded Focalizers in the Nonfictional Narrative of Brain on Fire
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺西雅之
2. 発表標題 「教養」と「実用」をつなぐ文体論の役割 ナラティブ・メディスンの実践方法に関する考察
3. 学会等名 兵庫県立大学 知の交流シンポジウム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田安曇・寺西雅之
2. 発表標題 A Study on the Correlation Between L1 and L2 Proficiency
3. 学会等名 兵庫県立大学 知の交流シンポジウム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田安曇・寺西雅之
2. 発表標題 母語による読書と英語習熟度の相関性についての研究 - 教育文体論を用いたライティング分析の可能性について -
3. 学会等名 岡山英文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masayuki Teranishi
2. 発表標題 Literature in the EFL classroom: A Comparative Analysis of Plural Texts of Jane Austen and Kazuo Ishiguro
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masayuki Teranishi and Azumi Yoshida
2. 発表標題 The Changing Concept of Liberal Arts and the Development of JAILA
3. 学会等名 Back to Basics: Renaissance of Liberal Arts Education East & West (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 那須 雅子、坂本 南美、寺西 雅之、和田 あずさ、飯塚 晃三、秋山 容洋、長谷川 裕、久世 恭子、大西 好宣、劔持 淑、保坂 裕子、小比賀 美香子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学术研究出版	5. 総ページ数 178
3. 書名 ナラティブ研究の実践と応用	

1. 著者名 那須 雅子、坂本 南美、寺西 雅之、和田 あずさ、飯塚 晃三、秋山 容洋、長谷川 裕、久世 恭子、大西 好宣、劔持 淑、保坂 裕子、小比賀 美香子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 178
3. 書名 ナラティブ研究の実践と応用	

1. 著者名 岩中貴裕、寺西雅之、吉田安曇他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成美堂	5. 総ページ数 95
3. 書名 The Intersection of Arts, Humanities and Science: Fifteen Selected Passages for University Students	

1. 著者名 Masanori Toyota, Masayuki Teranishi, 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 SAGE	5. 総ページ数 1872
3. 書名 Stylistics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ナラティブ研究の実践と応用 https://www.narratives-lab.com/</p> <p>兵庫県立大学研究者データベース http://kyoin.u-hyogo.ac.jp/staff/shse/teranishi/</p> <p>Researchmap https://researchmap.jp/masayuki teranishi</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------